

国語表記の現状

——ルビの問題を中心に——

中西 靖 忠

はじめに

ルビ復活論議が起っている。これを機会に日本語の最近の表記の現状をルビを核として考えるのが、この論考の目的である。先端科学の目ざましい発展は、急激に社会の様相を変えつつあり、日本語も大きく変容するだろうの予見がある。どうなつてゆくのか、大きい問題であり、わからないの一語に尽きるというのが正解であろう。

漢字制限の風潮から漢字の衰退は覆うべくもない。米国語を中心とする外国語の流入、これはカタカナ語となり、外来語まがいの横文字となつて、意味不明の言葉の氾濫を引き起している。この現実はどう対処するか、重病人を連れこまれた臨床医の心境である。結論をいつてしまえば、ルビを見直して積極的に活用すること、いま一つは新しい「文選読み」を工夫すべきではないか、との提案になる。

一、ルビの復活論議

飯沢匡が問題提起

ルビ復活をめぐる論争のきっかけは、飯沢匡が朝日新聞、昭和五十八年十月十七日の夕刊に「ルビ復活の勧め」を発表したことに因る。自分の子供たちによい本を与えても一向に讀まない。調べると漢字が讀めぬので興味が続かないことがわかる。そして自分の若い時代にはルビという重宝なものがあつた。若い時漱石の「吾輩は猫である」をルビつきで讀んだものだと思ひ出す。二十年ほど前にもルビ復活論を展開したが、当時はあまり問題にされなかつたという。再度の弁である。論旨は以下のようなものである。

今ヤングの「活字離れ」がいわれ、試験になると「珍答迷答集」が披露される。ルビ廃止がかなり強く作用していると思う。ルビがあつたらあんな珍答にならなかつたはずだ。日本の漢字は音と訓（よみ）がある。音にも漢音と呉音とがあり、訓に至つては千変万化しかねない。私は書けといわれればアヤフヤだが讀めといわれれば、かなりの量を讀みこなしてヤングを驚嘆させることが出来る。これは全くルビのお陰だ。はじめてお目に懸かる字に出会う度に讀書を中断し画を数え辞典を繰り、目的の字を探し出すというような辛苦に充（み）ちた作業をや

った結果ではない。そんなことをしなくては讀書が叶(かな)わぬのであれば、本を讀まなかつたろう。幸いに私の若いころは總ての讀み物にルビがついていたから度重なるうちに覚えた。要するに、頻度であり、愚鈍でもルビつき活字に出会う「頻度」によって漢字が克服できた。

「ヤングたちが楽に字が覚えられるように仕向けてやらねばならぬ。」エレクトロニクスによる、不明の字の上に検索機を置くと即座に字解と発音の出る機械は出来ないのか。「それまでは、ルビがヤングに本を讀ませる唯一にして容易な方法である。」「苦勞なしの成功」が現代の理想なら、「ルビつき」はその代表的なものであろう。と結んでいる。

カナモジカイの反論

飯沢の文に反論して投稿したのは、カナモジカイ理事のつかはらよしおで、十一月四日の「論壇」に「ルビ復活論は現代表記に逆行」の見出しで載る。「現代の日本語の表記法にたいして、いささかの自省もなく、安易な方法をすすめている。」として、

「ふりがなはムダな二重表記である。」「ふりがなをつけなければ讀めないような文字は、はじめから、ふりがなだけで書けば讀める。」「青少年にたいする国語教育は、ことばをただしく教えることであって、

「ルビをつけてまで、漢字のおかしなヨミを教えることではなからう。」と反論した。

実は飯沢の文には「ルビという便利重宝なものを何故やめてしまったのか。その張本人は、どうやら山本有三氏であろう。」と指摘して、「氏は苦学力行の人であったが、ひどい近眼であった。氏はこの近眼の原因はルビを讀んだことにあるとしてルビを仇敵(きゅうてき)の如く憎み、……」の一節があった。つかはらはこれを把えて、「山本氏はそんな低い次元にいる人ではなかった。氏は熱心な国語改革論者であった。安藤正次、中野好夫、高橋健二、滑川道夫氏等とともに昭和二十二年一月、国民の国語運動連盟をつくり、十項目の基本方針を決めた。」といい、方針を要約して紹介している。

①わかりにくい言い回しはやめる②わかりにくいことばを改める③讀みにくい漢字を使わない④あて字はやめる。隣寸(まっち)・矢張(やはり)・只管(ひたすら)など⑤接続詞、副詞、代名詞はなるべくかな書きにする。然(しか)し・寧(むしろ)・其(その)など⑥動植物の名は、原則としてかな書きにする⑦ふりがなは、やめる⑧横書きは左から書く⑩略字体のある漢字は、なるべく略字のほうを使う。

ふりがな廃止は一連の国語政策の一項目だといふのである。建前として一般大衆を対象すると至極妥当であり、異を立てることはないだろう。飯沢は若者の活字離れの現実を見て急ぎの対策を提案したの

だ。新聞紙面の論壇は紙面に限りがあるので委細を尽すのに困難がある。山本有三が目が弱くて連載小説を口述して完結したことも、ルビを毛虫のごとく嫌ったことも、自宅を研究所に提供し国語の浄化に心身を打込んだことも事実である。また読者大衆を意識するところから自己の論点のいい所を強調して我田引水の説に傾くことも避けがたい。飯沢はいささか難しすぎる漢字例を挙げているし、つかはらの「ローマ字等による正書法を採用している西洋諸国では、小学校低学年で新聞が読めるようになる」との説には異論が出るのではなからうか。

実務者から意見

こうした二人の対立した意見に対して十一月二十二日の同紙論壇に、校正を業とする主婦の友文化センターの深沢義雄講師からの投稿が掲載された。実務の体験に裏打ちされ、出版物の実情を踏まえた立論で「極端な廃止論も適切でないし、後ろ向きな復活論も建設的とは言えない。ほんとうに学習的なルビこそ活用されなければならない」と結論する。深沢の所論で前二者の噛み合わない論争も納まるところへ落着いたと言えるようだ。

「漢字が制限され、音訓が整理されても、全廃は不可能であり、また不便である」また「国語の抱える表現・表記の全問題が深刻に集中

的に認められるのがルビの問題である」とする深沢は「現在は、選択ルビ・必要ルビ・責任ルビのはずである。ルビはおろそかに扱えない」とし、ふりがなに関与する者を次のようにあげる。

- ① 筆者・作者が、自ら読ませたいふりがなをふる。
- ② 読者対象に応じ、難読度を判断し、出版・編集者が考える。
- ③ 施されたふりがなを校閲・校正で点検する。

そして読者の要望は、辞書を引かなくてすむ、辞書を引きやすいようにルビがほしいというにある。「読者に代って辞書を引く」という役目も校正・校閲者にある。大切な奉仕の一部であり、ルビ・ふりがなは、いわば補助物であり、注釈の一部である」と規定している。なお近ごろ、百科事典などルビが多くなり、歴史、地誌、文芸、宗教分野でふえる傾向で、学習目的とする児童図書なら総ルビも必要という意見が述べられた。

二、ルビとは何か

ルビの歴史

一字一字に意味を持つ漢字は、原義に加えさまざまに意味を加えつつ成長してきた。日本に渡来して字音と、和語に合わせた訓讀みの二つの讀み方に分れる。字音にしても呉音、漢音、唐音の区別があり、訓讀にも正訓のほか熟字訓、戲訓とか多様な讀み方が許される。それら漢字の讀み方を示すため漢字の右脇に付けたかなが、ふりがなであり、傍訓ともつけがなともいう。印刷が始まって和文字五号活字のふりがなとして用いた七号活字が、欧文活字のルビー(Ruby・約一・八ミリの方形活字・五・五ポイント)とほぼ同じ大きさであったことから、ルビと呼ばれるようになった。文章の中の漢字のすべてにつけたものを總ルビ、一部につけるのをパラルビと呼んでいる。江戸の民衆向けの木版本は漢字の總てにふりがなが付けられた。

日本で最初の新聞は元治二年(一八六五)、ジョセフ彦の「海外新聞」だが、その第一号にも、「改革が行はるゝ時は自然税も軽く」「通計八艘なり」「粧鉄船」「船号」など振りがなが用いられている。ルビの効用を果たしている。振り仮名の淵源は古いといわねばならない。しかし明治になって近代的な新聞が発行されるが、大新聞では漢字片カナ交りの書き下し文を採用する。漢字に素養のある指導者層が対象だったからルビはない。社会雑報欄でやっと平かな書きパラルビを採用しているだけである。商人、婦人、幼童を讀者対象に、啓蒙を意図した

小新聞は平かな總ルビを採用した。明治七年十月二日創刊の讀賣新聞は、「俗談平話」の口語体で總ルビ、本格的な小新聞として登場、大いに紙数を伸ばした。

明治初期の通俗的な讀物や図書には、字音の読み仮名のほかに、左側に意味仮名も振った。武部良明の「日本語の表記」(昭和54・12、角川小辞典29)には

休業 キウゲツ 厳正 ケンセイ 随意 ズイイ 遊戯 イウギ 健康 ケンカウ 良否 リヤウヒ
ヤスミ ヤスミ 公正 コウシ コロム、コロム 遊戯 イウギ 健康 ケンカウ 良否 リヤウヒ

の例をあげている。(四八一頁)字音のほかにその語の意味の理解をも助けようの配慮である。明治七年十二月二日紙面を縦型に刷新した東京日日新聞の雜報欄には、

小野組破産の處分云々……大家の身代限ハ……大蔵省へ御委任と相成……
おんさん ひきあて しんたいかぎり おまかせ

とあり、意味仮名の実例である。

なお同紙八年五月二十四日の社説には「吾輩新聞記者而已ナラズ三千三百万人が自由發論ノ權利ヲ失フト保ツノ境界ニシテ」とあり、筆者福地桜痴は「征韓論の気焰太だ熾にして幾ど軍隊政府の如き状況」(「新聞紙実歴」ともルビを使っている。後にていしやじょううていしやばと讀みの変る停車場にステーションと振った外国輸入の言葉のルビの例もある。漢語に訳したうえで原語に近い発音を片カナで振ったもので、註の役割をもしている。ルビを振るといふこと、振り仮

名は日本人の知恵であるとの思いを深くする。

付けたり(一) ひらがなの新聞

明治五年には、ひらがな分ち書きの新聞が発行された。一月の「東京仮名書新聞」二月に「まいにちひらがなしんぶん」「四十八字(いろは)新聞誌」で、読者対象を婦女子に置いている。中でも開明的官吏で、後に「郵便報知新聞」の生みの親・前島密が発行させた「まいにちひらがなしんぶん」は発行に当って、国内外の情勢を民衆に伝え知らせて、国の開化を助ける、目的をあげ、さらに次のように述べている。

ふたつにはわがくにはことばまなびのくになればかずおほくしてまなびがたきからのもじはなくてもひらがな五十じさへあればよろづのことすこしもさしつかへなきことをあまねくひとびとにしらせこのちおほひにわがくにことばのがくもんをおこすためにすりいだしんぶんしなれば……

欧米の先進文化に追いつくための文明開化を促進すること国語改良を實踐しようとの意気込み、また婦人の力の重視など変革期の先人の気魄が伝わってくる。

しかし、これらのかな書き新聞は漢字を知っている者には、讀むのが面倒だとされて、あまり買われなかった。いずれも二、三ヶ月で、「まいにち……」は七年五月(廃刊)に追込まれている。

参考 伊藤正徳「新版新聞五十年史」昭22・鱒書房、春原昭彦「日本新聞通史」昭44・現代ジャーナリズム出版会、「毎日新聞百年史」昭47・毎日新聞社、ジョセフ彦「海外新聞」昭52・早稲田大学

山本有三の活動

わが国の国語国字問題は海外からの衝撃を受けて起っている。一つは明治の開国、維新の変革に際してである。西欧文化との隔絶に驚いた要路の人士が、先進諸国に伍してゆくためには国語の改良が先決だと考えたことも首肯できる。前島密が「漢字御廃止之儀」を慶応二年に將軍徳川慶喜に建議したのにはじまる仮名専用論、西周の洋字(ローマ字)採用論、漢字節減論が起っている。国語を英語に代えようと真剣に考えた森有礼のような人も出た。もちろん簡単にケリのつく問題ではなく、永遠に「現在の問題」といってよい。

次の大きな衝撃は今次大戦の敗戦であり、志賀直哉に「いつその際フランス語を国語にした方がよい」と発言(昭21・4『改造』「国語運動」大野晋の本による)があったほどだ。米国からの発言が大きな

刺激となって、漢字制限の運動に拍車がかかり、当用漢字制定など次々施策が制定されるが、いまは沈静、反省期の様相だ。五十六年三月の常用漢字採用が大きく軌道を修正している。

さきに飯沢、つかはら両氏が指摘するようにルビ廃止ほか国字改革の戦後の原動力になったのは山本有三である。しかし山本は敗戦を期に活動を始めたのではない。昭和十三年に「ふり仮名廃止」を唱え、しかも作品上で独力実践していたのである。

この年、『主婦の友』一月から三月号にかけて載せた「ストー夫人」と十一年に発表した「はにかみやのクララ」を併せて単行本「戦争とふたりの婦人」を岩波書店から出すに当って、あとがきに「いっさい、ふり仮名を使わないことにいたしました」で始まる「国語に対する一つの意見」を掲載した。山本は言う。

……いったい、りっぱな文明国でありながら、その国のもじを使って書いた文章が、そのままでは、その国民の大多数のものには讀むことができないで、いったん書いた文章の横に、もう一つ別のもじを並べて書かなければならないということは、国語として名譽なことでしょうか。

……文明国である以上は、その国の国語をもって書かれた文章は、それがそのまま、だれにでも（義務教育を受けた人になら）讀めるものでなくってはいけないと思います。

これを実現するには第一の方法は漢字全廃、そして第二の方法は、「ルビをやめてしまうことです。あの小さい、みにくい虫を退治してしまうことです。これは漢字を全廃するというような、大きな問題を含んでおりませんから、さし当って実行するには、最も手取り早い。」
「古くさい美辞麗句や、むずかしい漢字をやたらに使う」のを止めて、だれにでも讀める、やさしい、讀みやすい文章にしようと説いたのである。

山本は、一國の国語としての尊嚴保持と文体の革新になるほか、

一、おのずから漢字制限を実行することになる。一、目で見て讀みやすく、耳で聞いてもわかりやすい文章になる。一、国語が浄化される。一、国民が心から国語を愛するようになる……などの利点をあげた。

この意見は各方面に大きな反響を起し、十二月にはそれが「ふりがな廃止論とその批判」の一冊となって白水社から出版されたという。

山本は十一月号の「主婦之友」から「新篇 路傍の石」を掲載するが、ここでは主張通り出版社にルビなしを実行させている。（東西朝日新聞 昭12・1・1〜6・18に載せた旧稿は旧表記、漢字の大部分にはルビがついていた）

戦後いち早く東京三鷹の自宅を開放、元台北帝大總長の安藤正次を所長に招いてミタカ国語研究所を創設、憲法の口語化、国語の新表記を推進など尽力した。二十一年少年雑誌『銀河』の創刊、編集に当っ

て、ルビをやめ、易しい漢字使用など実践した。つかはらの論は山本の所信を踏襲したものと見てよい。

山本有三（明治20・7・27〜昭和49・1・11）劇作家・小説家、山本有三全集一〇巻（岩波書店）同十二巻（新潮社）一六年帝国芸術院会員、戦後貴族院議員、参議員議員、四〇年文化勲章。二二年国語審議会委員・当用漢字主査委員長を務める。

三、現在の文章

当用から常用への漢字表

現代表記で使用する漢字を決めたのが当用漢字表で、昭和二十一年十一月十六日内閣告示となった。一八五〇字、漢字はこの表にある範囲でと、漢字を制限することが好ましいの考え方に立っている。できれば将来もつと漢字を減らそうという方針であった。当用の意味は「差し当たりの用に供するもの」で時代の進展とともに、別に作る教育漢字表（八八一字）に近づけるための過渡的なものといわれた。そして法

令、公用文書、新聞、雑誌および一般社会での漢字使用の範囲を規制し、表にない漢字は仮名書きか言い替えを必要とした。また振り仮名は、原則として使わないことに決められていた。

以来三十余年経って五十四年国民の意見も聞いた「常用漢字表案」が出来、これを基本にして五十六年三月二十三日第十四期国語審議会（福島慎太郎会長）は一九四五字の常用漢字表を答申し、発表した。これは終戦直後の方針を修正したものになった。漢字制限の態度を排し、使用度や機能度（特に造語力）の高いもの、また概念の表現上、仮名書きでは分かりにくい字は増して、漢字かな交り文の利点を生かそうとした。「分かりやすく通じやすい文章を書き表すための漢字使用の目安となることを目指したものであり、表に掲げられた漢字だけを用いて文章を書かなければならないという制限的なものではなく、運用に当たって、個々の事情に応じて適切な考慮を加える余地のあるもの。科学・技術・芸術等の各種専門分野や個々人の漢字使用にまで立ち入ろうとするものではなく、従来の文献などに用いられている漢字を否定するものでもない」。従って振り仮名についても「読みにくいと思われるような場合は、必要に応じて振り仮名を用いるような配慮をするのも一つの方法であろう。」と趣旨が説明された。国語政策の大きな方向転換である。しかしこの見直しを周知徹底させるほどの積極的な活動は何らなされていない。

新聞の小説など

新聞社の中で積極的に振り仮名を復活しているのは讀賣新聞である。もっとも連載小説に限られているといつてよい。陳舜臣の「曼陀羅の人」は空海が主人公で唐時代の中国を主たる舞台としているから馴染の薄くなった漢語・(人名)には讀み方の明示が必要であり、現代の讀者への深切というものだった。司馬遼太郎の「箱根の坂」は北条早雲の時代。登場の人物の讀み方はもとより位階についても「從四位下陸奥守」じゅうしいのげむつのかみ(書き流したが、右脇に付したルビである)というように、当時の呼び方をふっている。十一月五日付、四九九回には、

人名のほかに地名等では、相模国、馬入川、油壺、古河、新井城のほか古今集にもふられ、一般の語では・を付した語に用いられている。

箱根の山嶺以上の障害がある。

才覚人に越ゆ

法体のほうが似合う

みずからは隠居の体をと

早雲が併呑すべくねらっている

関東公方足利成氏に

尋常ならざる官爵を得る

その家系に守と称する者が

これらのルビは歴史物であるからというばかりでなく司馬氏の硬質な文体にも起因しており、連載に当って新聞社も諒解したことであろう。同じく夕刊連載の川口松太郎「一休さんの門」94でも

土倉とは質屋のこと、一揆、烏合の衆、世の中の屑だ、そんな奴、都中を駆けまわって火灯頃には銅駝坊へ帰った、賣扇庵の庫裡、夕餉の仕度、忽ち都中に知れ渡って

等々に用いられている。このルビを振るのは社の方針であろうか、現代ものの「戦争」(2106)にも「渡辺敏(おさむ)さん」「満州で貯(た)めた」「渡辺さんたちが、急遽(きゅうきょ)にルビがある。しかし難寧憲兵隊など満州の地名には振られていない。

朝日新聞の場合、夕刊の山田風太郎「八犬伝」は「箱根の坂」とほぼ同じようにルビを振るが、数は多くない。三五一回、虚実冥合・江戸信濃坂二十四”では、半切(はんせつ)、扇谷(おうぎがやつ)定正(ぎょうじやう)然(ぜん)、闇黒(あんこく)、苦悶(もん)、模糊(もこ)である。そして一方記者金関寿夫のドナルド・キーンの「百代の過客」をみると、十一月四日は「とはずがたり」3に当る。古典を讀み解きしながらの論考であるからルビがなければ難解である。しかしルビでなく文中に()に入れてよみが書かれる。註釈というわけでもない。つぎのよう

に表記されている。「雪の曙(あけぼの)」「西園寺実兼(さねかね)」「小夜衣(さよころも)」

「院の腰を打ち叩(たた)いて差し上げていた時」「御後(おあと)にあるを」「院の御部屋と襖(ふすま)一つ隔てた」「院の心の寛(ひろ)さ」というよりは、女としての二条への軽蔑(けいべつ)の情である」

これらは、すべて筆者が仮名を振るのが例であると思われる。(カッコ)で括るのは、ルビを振る工程上の煩瑣を避けてのことであろうが、文章が長い場所を取ることは避けられない。

毎日新聞の朝刊小説、曾野綾子の「時の止まった赤ん坊」では、毎回、茜、小木曾と登場人物名にルビが振られている。これは編集者が気を付けていることになろうか。でも鼻から出る水っぽい液ははなみずでもなく、字はルビを振った漢しかないと考える。「神の僕」にしもべと振られていると、この字に代るものない漢字を使っていると感じさせられる。作者が振ったルビであろう。その点「長英逃亡」の吉村昭はルビを極力排除する姿勢である。作者の文体の問題であり、漢字への立ち向い方の問題が大きいといえる。

同紙十一月二十一日に二松学舎大教授の青山忠一が「銀杏は、なぜいちようか」を発表しているが、百二十九行中ルビを振った字が、もちろん文中初出の時だけで左のごとくある。工程では手数のかかった紙面であろう。

公孫樹 銀杏 初める 一入 茶碗 核の 訓む 杏子 稱ぶ 柚子
所以 雌雄異株 木賊 園原山 展げて 砥石 砥草 紅葉 紅花

榎む 紅 藍 紅 頬丹 蔦 楓 蛙手 無花果 松茸 菌類 占
地 担子菌類 濕地 椎 栗 檜 榎茸 木の子 岩茸 石茸 岩
苔 地衣類 牡陰

四十三語ある。秋を彩る植物誌だからルビが多くなるのは詮ないことだが、一般の語も混っている。出てくる植物名をカタカナにしたらと考えても植物に興味のない者には、なお不可解なだけだろう。

付けたリ二、日本語の片カナ書き

ここで一般の新聞記事に触れておこう。といっても、事件記事ではなく、解説とか展望の記事からで、五十八年十月九日のサンケイ新聞、田中判決を目前にした「政界嵐の前」②、見出しは△田中包囲網▽、角福戦争△ケリを▽「倫理テコ 非主流派結束図る」で、△ケリ▽△テコ▽のカタカナが目についたので採りあげたので他意はない。全文一二三行、一行十五字詰めである。ルビ付きも、漢字のよみを示した語は一つもない。そこでカタカナ語を拾ってみることにした。十九語が二十一回に使われている。

パーティー 2 チャンス 2 ポスト 中曽根 ターゲット ボイコ
ット ケース コンビ プリンス リーダー エールの交換 ウ
ーン(地名) OBサミット
日本語のカナ書きは

セリフ(台詞・科白) テコ(挺子) ウカツ(迂濶) ブチ上げ 主
導権はオレ(俺) ケリ(梟)をつける トンボ返り

で、漢字のあるものは私が()に入れた。迂濶や梟、俺は表に
ない文字でカナ書きである。挺子でも動かぬなどと通常よく用い
るテコだが、これは機械の専門語なのだろう。セリフやケリにな
ぜこの漢字を宛てるのか、残念ながらいまの私には解らない。他
は英米系の外来語で、日本語(和語)を含めて、こうカタカナが
ふえてくると、語源が外地なのか内地なのか将来混乱してくるで
はないかと心配にもなってくる。

先生が、せんせいになったり、センセエになるとか、倫理が鈴虫
の声のリンリ、リンリと変る世の中である。カナ書きが揶揄や嘲弄
の気持を含めたり、アクセントを付加する効能があつて、それなり
の味わいがある。多様化ということも避けるわけにはゆかない。最
近自動車の新車の命名の広告を見たが、「みんな 凄^{ワシ}い」とある。ワ
ンダーとは、現在若者たちの使う「スゴイッ」の意味で付けたの
であろうか。細い説明には「はじめて出会う、走りのエアロライナ
ーシエイブ」「FF(私には不明)の先駆として、つねに時代をリード」
「八人間のためのスペースを最大限に、メカニズム・スペースを最
小限に」とする独自の M^{マン・マキシム}・M^{メカニニム} 思想を核として「まさにワン
ダー(驚異の)なシビックです」とある。また自然^{ザラシ}は、人の心を読み

ます」の建設業者の広告も目についた。宣伝・広告界の言語感覚は
異様に磨ぎすまされ原義以上のものを付加しつつある。

教科書の扱いについて

小学校の国語教科書ではルビをどう扱っているか。光村図書出版の
国語を見てみる。昭和五十四年三月文部省検定、同五十七年三月改訂
検定済の教科書。一年生の上では符号の^{まる}。「^{かぎ}」に読みを付けている。
同下になって二九頁に「いたの間に」が漢字での初出で、いま一度^{まる}。

「^{かぎ}」が、まる、かぎであることを念を押している。
二年生の下使用の『赤とんぼ』になると四篇の童話が載せられてい
る。△むかし話を 読もう▽は、いわさき きょう子の「かさこ地ぞ
う」である。ばあさまのことば

「ああ、その へんまで お正月さんが (おいでになる)
ござらっしゃると いう
に、もちこの 用意も できんなあ。」

とある。老女の方言的な語り(カッコ)つきひらがなで、右脇に
標準語による意味をルビとして付けている。意という高学年に至つて
習う語には、字音を振っている。この方式は注目されてよいし、幼い
児童を対象としてみると教育的効果も大きい。幼児絵本には笑い声な
ど擬声音の片カナに、ひらがなを振るが、その方式である。さらに、

える日経新聞の十月十五日の記事は、閣僚名を次のように表記している。

陳懿鐘(ちん・いしよ)民主主義党代表委員(62)を首相とする新内閣
：副首相兼経済企画院長官には申秉鉉(しん・へいげん)韓国貿易会長、
新外相には李源京(り・げんきよ)体育相を起用：

他の閣僚には括弧つきの読みも付けていない。同日の朝日新聞は陳首相にだけ(ちん・いしよ)氏(六一)と読みを入れている。この呼び方は日本人にだけ通じる呼び方であって、現実には用いようのない無用のことである。この呼び方にわれわれが馴染んでいるので捨てがたいというのなら、高史明の呼び方のように左右にルビを振るべきである。

なお、三省堂の中学二年用教科書「現代国語」2には魯迅(ろしん)の「故郷」を取り上げている。訳者は竹内好である。その「学習の友」(ルビ)二二三頁に魯迅について次のように紹介される。

一八八一年八月三日(旧曆)、浙江省、紹興市の東昌坊口で生まれ
ました。家は代々学者でした。祖父は翰林学士として中央官僚の一
員でした。：魯迅は十七歳の年に南京の江南水師学堂(海軍の学校)
に入学、翌年、江南陸師学堂(陸軍の学校)の鉱路学堂(採鉱・冶金
科)に移り、二年後に卒業しました。

ここでも、ひらがなとカタカナのルビが振られている。ひらがなが漢字の日本讀みの発音であり、カタカナが出来るだけ現地の音やその

家族の呼ぶ名に近づけようとしている。しかし、すべてにその法式を

採るとしたら翰林学士、江南水・陸師学堂の歴史上の固有名詞はともかく東昌坊がなぜ(とうしようぼう)なのか。また日本人に親しまれた浙江や紹興が(チョーチャン、シアオシン)と現代音の表記だけで充分なのか、国交を深めてゆく点からも解決を急がねばならぬ問題だ。米国など海外にいる漢字国の人がニュースになった場合、「NASAの中国天文学者、ホンイェー・チュー博士」というように入電し、記事となっている。

中国の地名・人名の書き方については、国語審議会が二十四年八月、文部大臣に建議した案がある。「中国地名・人名の書き方の表」である。骨子は「歴史的な地名・人名を除き、民国以後のものに適用し、原地音に近いカタカナ書きで、漢字をあわせ示してもさしつかえない」という。「しかし、時期尚早とのことで内閣告示という形にはならず、全面实施には至らないまま今日に及んでいる。」(武部良明「日本語の表記」昭54角川小辞典29)なお、文部省国語課は二十五年三月、この案を基に「中国地名・人名の書き方の表・便覧」をまとめているという。

学者の解説文例

東京大学新聞研究所の稲葉三千男教授の文で考えてみたい。「情報の

公開とプライバシーの権利」という解説的論文で『情報公開と知る権利』

(80・3三省堂)の巻頭に載っており、

「このテーマにとっての主要な鍵概念は、 \wedge 情報 \vee と \wedge アクセス \vee とである。副次的な鍵概念としては、 \wedge メデイウム \vee が考えられると書き出される。その一部を書き写してみる。

政治権力機構の内部に設けられ、厚く塗り込められようとする暗箱を、公衆に向けて公表するたかいたかった。もちろんその公衆を形づくっている個人々は、それぞれに私的生活を営んでいる。そういう近代人が家庭の外に出て、政治の場で発言し、選択し、行動する、そのための情報を提供するのが政論新聞である。

この文中にある暗箱については、少し前の所で「十八世紀に、ドイツの宮廷で、官房学Kameralsistikが誕生したことに触れておこう。その語源のCameraは、金庫であり暗箱である」。また初めて(一八九〇年)プライバシーの権利を主張した、サミエル・D・ウオーレンの事績を紹介する中で「暗箱black box」の単語を出し、ほかに「権力機構の内部は暗箱で…」というように、十分に註釈に等しい説明があるからルビを廃したのだろう。

また「家庭」の言葉については古代ギリシアの市民社会に触れて「集会所などで営むポリスの生活と、自分のオイコス(家)で室内奴隷を使役しながら営むプライベートの生活をもっていた」の説明がある。

古代ギリシア語やギリシア語由来の米英独の外国語をカタカナのルビにして、ことがらの淵源にまで遡って説明しようとの意図である。

しかし初頭に我々が見慣れたメディアでなくラテン語語源と覚しい \wedge メデイウム \vee を使ったのは何故だろう。角川小辞典の『外来語の語源』ではメデイウムの複数形がメディアをいうのだが。外来語化した単語はカタカナで本文に用い、外国語は漢語に訳したうえで、その原語をカタカナルビで示し、その典拠を明らかにしようとする手法である。中には「みんなの話題」「讀者」「規範の柔軟さを硬直させてしまう」「国民のプライバシー情報に権力が押し入る」なども見えるが、ついカタカナ語で書きとばしてしまいそうな言葉である。筆者の学問に対する深切な態度の表われといえよう。

さらに外国の制度や官庁に疎い者に、周到的な配慮と思われるのは、次のようなルビのつけ方である。 \wedge 行政監理委員会 \vee とか \wedge 社会保障番号(SSN) \vee \wedge 情報公開法(FOIA) \vee 。またすでに一般化しているコンピューターの用語もルビにして、分かりやすい文章にしている。例えば「一億数千万人のSSNがSSAに登録されているが、問題はその出先きである。」「それを国家権力がどのように監視して」「自分の意思で送り込んだプライバシー情報の如くである。」

学問的に主張の正確を期し、その根拠を述べようとすると註記に頼らねばならない。その煩雑さを避けて、稲葉のようにルビを活用する

ことは、読みやすく分かりやすくする一つの方法のように思われる。

付けたり③ 会話の中の外来語

それが漢語であろうと、カタカナ書きの外来語であろうと意味が通じることが第一の要件である。ところが交通機関の発達は地球を狭くし、未知だった外地の体験を持ち帰る人が多くなった。目を見張るばかりの新しい科学・技術が生みだす新語、国際的に広がり複雑さを加える政治・経済、思想の新概念を表わす言葉。現代の生活では、外来語を知らずしては生活できないところまで来ている。

日本語に深い関心を持つ学者たちの対談にも外国語が多く交るのが実態である。大野晋編『対談 日本語を考える』(昭54・中公文庫)の中の「ことばの根源にひそむもの」に、江藤淳、鈴木孝夫との鼎談がある。その中で江藤は、

私は同業者が、国語の中で当然そういい得るようなことを翻訳調にいいかえて得意になっているのを見ると情けないと思います。…やはり国語でいえる範囲は国語でやってもらいたい。国語では自分の意図が達成し得ないというなら、工夫した表現が国語化するように努力してほしい。女の子の洋服のファッションみたいな調子で、半可通の翻訳調をふりまわしているのを見てみると、ヘドが出そうになる。

きびしい註文である。…の箇所には「小説家が作品の中で、風俗描写に使うとか、人物のキャラクター・スケッチをするために使うのはけっこうだけれども」が入るのだが、△キャラクター・スケッチ▽などの言葉がつい出てくるのである。そのほかに△レベル▽△ポジティブにもネガティブにも▽△アイデンティティの核▽△アイデンティフィケーション▽△交差文化的な▽△アクロバティックな▽△スノビズム▽△ジャンル▽△チョコレート・ボックス▽△ホリゾンタルな世界▽△セミナー▽。初めの発言と矛盾してはいないだろうか。

『日本語を捨てる日本人』の著書のある鈴木孝夫に拾えば、△コンテキスト▽△ブーム▽△ナシヨナリズム▽△アイデンティティー▽△プロセス▽△マニア▽△スペシヤリスト▽△ノイローゼ▽△タイプ▽△ホーム▽△フェアな勝負▽△レベル▽△ファクター▽△アンバランス▽△セット▽△ユートピア主義▽△トランセンデンタル▽△シャーマニズム▽△ウートポス(ギリシア語)▽△フラストレーション▽△ユニーク▽△プラスとマイナス▽△レゾナンスの▽△フィルター▽△言語のジュニー(真髓)▽△コミュニケーション▽

大野晋でも、△アプローチ▽△バック▽△デモクラシー▽△タイプ▽△ダイアログ▽△単語のバラエティー▽△比較的ベーシック▽等があげられる。大野は「少なくとも漢字で表現されている語彙の半分以上がカタカナ語に置き換えられる時が相当近い将来に来るだろう。」

(『日本語について』昭54・角川文庫)と警告している人である。

ここにあげた三氏の用語、意味がわかるような気のものもあれば、解らないものもある。外来語と称すべき語もあれば、外国語または専門語もあるようだ。簡単な理解を得ようとするには辞書を必要とする。

この点漢語の場合とも同じだ。外来語辞典にも記載のない単語はどうすればいいのだろうか。

五十八年十月二十三日の毎日新聞に老人福祉の用語にカタカナ語が多くて、お年寄りを戸惑わせているという記事が出ている。ホームヘルプサービス、ショートステイサービス、ケアセンター、メディカル・ソシアルワーカー……など。「パウダーを使うのは、お年寄りの性に合いません。(略)バブラーを使えば、からだが生かから温まります。(略)床面を温めるためにサーキュレーターを使うといいでしょう。」と、書いてあるのは、厚生省社会局福祉課監修の手引書という。我が国の役人は外国語好きである。△公開ヒアリング▽△民間の政策構想フォーラム▽△シルバー人材センター▽△アニメティ・タウン▽△アイバン・サンクチュアリ▽は原子力安全委、農林水産省、労働省、環境庁の用語であり、△オレンジライン▽△グリーン車▽△フルムーン▽は電電公社、国鉄などの造語。専売公社の煙草四十一銘のうち三十五種まで外国名。外国に輸出に力を入れているのなら賞められることだが。ただ官僚の優越感からの外国語使用なら問題である。官庁用語で

大衆に難解と思われるカタカナ語には意味ルビを振るのが望ましい。

四、結論として

二つのルビと新文選讀み

振り仮名、ルビは、漢字仮名交り文である私たちの文章の漢字の問題と想っていたが、増えるばかりの外来語のカタカナ語や和製外国語にも振った方がよいと思うようになった。ことばはわかり易く読みやすく美しいものでなければならぬ。学問をした人の仲間内のような話はいただけないし、ひとりよがりも困ったものだ。自分だけ知っている外地事情をひけらかす時代でもあるまい。讀みと意味とを示す二つのルビを振っても、そう目障りとは思えない。ルビ用にひらがなとカタカナの二種の表音的文字を持つ日本語は便利なことばである。魅力ある漢字を大切にすることも、もちろんのことである。小説家がルビ使用に工夫を凝らした例を大槻鉄男が挙げている。囲われている女が男の家へ手紙を出し、とがめられている場面、次に引用する。

「それぢやアもう手紙はあげませんから毎日お来臨なさいよ、屹度」と無理を云ふのも「かけ口舌」、女が自然と得たる対話法なり。「そりやア毎日おいでなすって、かうやって居たいが出来ない相談だ」

(「冷干氷」踏波仙・露伴子、合作、明治二十三年)

女は男に「お来臨なさいよ」と言い、男はからかい気味に女の口調をまねて「おいでなすって」という、仰々しいお来臨と仮名書き、続いて女が言う「それが一月も御来臨なさない…」と三様に書き分けた妙味を指摘している。(『日本語の世界』14「散文の技術」昭56・中央公論社)

しかし、これは文学上の鑑賞の問題である。意味を伝達する点から考えると、意味不明な、または誤解の上に立った和製外国語は排除しなければならない。外国の単語であっても言葉は新しい意味を加えてゆく多義性を備えている。よく使われる「キャラクター」や「アイデンティティー」などの語も、使う人によって微妙な意味のずれがある。難しい漢語や外来語を使うほうが適切とされる時は、意味を限定する読み方を加える表記が必要ではないか。それが私の言う「新文選読み」である。

文選は梁の照明太子肅統が撰した詩文集、わが国でも平安時代に必讀の書とされた。広辞苑によれば、文選をよむのに文字を音讀し、更に同文字を訓讀する読み方が行われた。平家物語巻七の平家の福原落

ちの文選讀みの例がよく引用される。

：袖に宿かる月の影、千草にすだく蟋蟀のきり／＼す、すべて目に見え耳にふるゝ事

蟋蟀の訓がきりぎりす。こおろぎの事である。古人の知恵に積極的にならえというのが私の提案である。しかし実際には行われていることでもある。

「本書は、ソシオリングイスティックスーつまり、社会言語学とでもいうべきものの新しい試みである。」(ハーバート・パッシン『英語化する日本社会』まえがき)

の、「つまり、社会言語学」を付けることが「新文選読み」方式である。△グローバル▽「すなわち、地球的視野に立って」でも、「一つまり、全世界的な」とでも。△マルチ・タレント▽「多くの分野に活躍する」「多彩な能力を持つ」△マルチ商法▽「多角経営」△マルチ・チャンネル▽「大きい」「強い」「多くの」「総合的なシステム」のように訳語をつけて表記したら、いかがであろうか。

知日本語家の忠告

われわれの外国語に対する、あまりにも無防備で自覚を欠いた対応を論じるのは、本稿の主目的ではない。しかし日本語をこよなく愛する外国の友人の危惧、憂慮をもここに載せておきたい。

ハーバート・パッシン（一九一六年シカゴ生まれ、コロンビア大学教授）は八〇年に「Japanese and the Japanese」を出版した。八二年に訳されて「英語化する日本社会」（82・12サイマル出版会）題名に魅かれて手にとった。

「日本語は、今日ただいま、英語の語彙ゴキヤブのすべてを吸収しつつある」と言っても過言ではないだろう」「欧米語を大幅に採り入れている今日の日本語の変わりようを見ると、伝統的な日本社会の思想なり感情なりを表現するには好都合だった古い日本語のパターンでは、もはや今日の日本社会の思想や感情を表現しきれなくなっている」

彼が日本人への評価を変えたのは看板で見た「〇〇シユーズ会社の大五則」だった。それは、センスがあること、スマートであること、エチケットがあること、タフであること、ファイトがあること、と大切なこと全部が外来語だったことだ。しかも英語国民の使う意味とは「ちょっと違う」意味に使われている。「要するに、外来語は結構。だが、意思を伝達できないようなやりかたはだめだ」が彼の忠告である。

ジャック・ハルペン（一九四六年西ドイツに生まれ、イスラエル、ブラジルを経てアメリカへ。日本語を学ぶため七三年神戸へ、徳島を経て東京へ。日本名春遍雀来）『不思議な日本語 不思議な日本人』（昭53・青地書房）から、

「カタカナ混じりの表現が、カッコイイともてはやされ」ている。

また「話す本人は心からの好意で外来語を混ぜているらしいが、とんでもない錯覚だ。よく分かるどころか、かえって理解の障害になっている。」

「日本人が英語と思いこんでいる」が、そればかりでない。マイホーム、マイカーのような和製英語、音韻組織の大きな差による発音の違い、「外国人にとって、これほど分かりにくい言葉はない。」「外来語にドップリ浸っている人たちの感覚は、果たしてみんなこうなのだろうか。」「害癩語である外来語の悪病を追い払い、もっと誇らかに日本語を使い、日本の文化を守ろうではないか。」

ドナルド・キーン（一九二二年、ニューヨーク生まれ、日本文学紹介の業績で六二年菊池寛賞ほか。コロンビア大学教授、朝日新聞客員）『日本人の質問』（83・朝日選書）から。

和製英語の氾濫に関して、次のように指摘する。

「日本人は必然性のない言葉まで外来語を使う」

たとえば「トイレ」。トイレという言葉を使う必然性は、まったくはないはずだ。「便所」がきれいな言葉でないと思うなら、ご不浄とか、お手洗とか言えばよい。それでもトイレと使いたければ、トイレットと完全な形で使えばよいのに。外国でトイレといっても通じない。外国へ行ったとき実際に役立つような使い方をするのが当然だと思う。

「日本人は平気で言葉の初めや終りを省略して使う。」

駅の「ホーム」という言葉も、最初、私が聞いたとき、何のことかさっぱりわからなかった。正確にはプラットホーム。ホームと言つてわかる外国人は、百万人中一人もない。外国へ行って、「ホームはどこか」と聞いても、聞かれた人は、せいぜい紙に自分の住所を書いてよこすのが関の山であろう。

ロサンゼルスをロスというのも同様、アメリカでロスと言つてわかる人は誰もいない。どうせ省略を使うなら、LA(エルエイ)と言つてほしい。これならすべてのアメリカ人に通じる。ロスというのは文字どおり、「ムダ」なことである。

これら三氏の指摘は何ら耳新しいものではない。大野晋の「日本語はくずれ、ほろびてしまつたろう」(『日本語について』昭54・角川文庫)の発言のほか、数多くの人々が同様の指摘をしている。三氏は海に向うに生まれた人々で、その指摘だから挙げたのである。内側からの発言は「軽薄短小」などと、自嘲の意もこめて語られている。

「漢字・アルファベット等文字システムの言語形成・思考におよぼす影響」の研究グループは『世界の中の日本文字』をまとめた。八昭55・弘文堂)そのまえがきで、私たちの使う漢字仮名交り文の性格を総括して、橋本万太郎は、

「わが日本の文字システムは世界に行われている主要な表記法のど

れよりもすぐれた、立派な文字システムである。……わたくしたちは、一〇〇パーセントほんきである。」

と述べている。視覚から入る表意の漢字と耳から入る表音のカナ文字、脳の左右を働かすの説もあるが、ローマ字、アラビア数字、各種符号も包容しうる世界独特の表記法である。このシステムをより活性化させる道をルビ問題を含めて考えてゆきたいものである。

カナ文字の品は使わぬ母の味

「日本人の習慣」 宮下よしみ(毎日川柳 58・9・19)

高松短期大学研究紀要

第 14 号

昭和59年3月15日 印刷

昭和59年3月25日 発行

編集発行 高松短期大学

〒761-01 高松市春日町960

TEL (0878)41-3255

印刷 高東印刷株式会社
高松市東山崎町596番地